日中女子大学生の甘えの背景に関する調査研究

An Investigative Research on the Background of 'Amae'

原　崎　聖　子・篠　原　しのぶ

Seiko Harasaki・Shinobu Shinohara

キーワード：甘え　養育姿勢　生活意識　日中比較

はじめに

われわれは昨年、日本学生と中国学生の経済感覚を比較したところ、日本学生はアルバイトなどの収入を、自分自身の生活を満足させるために使用するが、中国学生は家族・友人との満足感を共有しながら使用するという違いを見出した（篠原、原崎2003）。また、中国学生との比較において日本大学生の甘えの高さは先の研究で指摘した通りである。（篠原、原崎2002）。現在の中国における学生は1979年にスタートした「一人っ子政策」の多大な影響を受けて成長している。また、同様に、現代の日本学生においても核家族化・少子化の影響を受けて周囲の環境は変化し、生活の中で関わりを持つ人間の数は減少するばかりである。そのような両国にあって、日本学生と中国学生の甘えや経済感覚に上記のような差異がみられるのは何故だろうか。今回の調査では、幼児期の親の養育姿勢に注目しながら以下の４点についての両国の比較調査を進めていく。

①「甘え」について
②「生活意識」について
③「愛他性」について
④「幼児期の親の養育態度」について

Ⅰ．調査手続き

対象：福岡市内　　女子大学生　237名
　　中国大連市　　女子大学生　125名
内容：甘えに関する質問
　　30問（５段階評定）
　　生活意識等に関する質問
　　30問（５段階評定）
　　愛他性に関する質問
　　21問（５段階評定）
　　幼児期の親の養育態度
　　40問（５段階評定）
　　非常にあてはまる：５～全くあてはまらない：１の５段階評定
期間：平成2002年６月～2002年９月
方法：日本学生：2002年６月集団質問紙調査実施
　　中国学生：2002年８月大連市内大学へ出向き調査交渉及び依頼、学生は夏期休業中のために、質問紙は記入後、９月に日本へ返送していただいた。

Ⅰ．「甘え」についての日中比較

これまで、われわれが調査して得られた甘えの６因子について、表１．並びに図１に両国の得点差を示す。これによると「引っ込み思案の甘え」「受容・承認を求める甘え」「屈折した甘え」「責任回避の甘え」「非自立の甘え」「追従の甘え」のすべてにおいて有意差が見られ、

表１．「甘え」の平均値・標準偏差と検定結果

	日本女子　N＝237		中国女子　N＝125		検　定
甘　え　因　子	平均	SD	平均	SD	t値
引っ込み思案の甘え	14.40	4.54	11.92	3.19	5.43***
受容・承認を求める甘え	18.52	4.03	16.72	2.95	4.39***
屈折した甘え	15.43	4.58	13.88	3.69	3.27***
責任回避の甘え	13.02	3.65	11.28	3.59	4.34***
非自立の甘え	17.57	4.23	15.05	3.71	5.61***
追従の甘え	14.05	3.09	13.16	3.20	2.57**

＊＊‥１％水準、＊＊＊‥0.1％水準で有意差あり

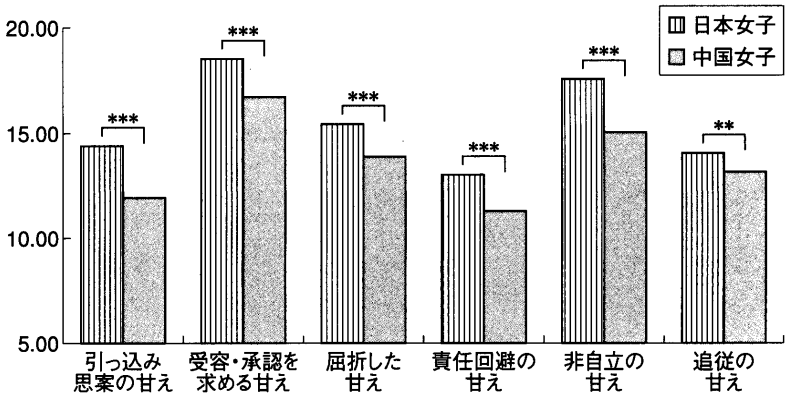

図１．日中女子大学生の「甘え」比較

日本学生が中国学生より高得点であった。(t=5.43, df=360, P<.001；t=4.39, df=360, P<.001；t=3.27, df=360, P<.001；t=4.34, df=360, P<.001；t=5.61, df=360, P<.001；t=2.57, df=360, P<.01)。

その中でも「非自立の甘え」と「引っ込み思案の甘え」は平均2.0以上の差を示していた。

今回の結果においても日本学生の甘え得点の高さが示された。このことは、日本人に存在する自己卑下意識つまり、自分の有能さを前面に押し出すことを躊躇する意識を考慮に入れたとしても、現在の両国学生の状況を反映していると思われる。

次に甘え得点の順位に着目すると、上位3項目は両国とも「受容・承認の甘え」「非自立の甘え」「屈折した甘え」となっており、以下日本は、「引っ込み思案の甘え」「追従の甘え」「責任回避の甘え」と続き、中国は、「追従の甘え」「引っ込み思案の甘え」「責任回避の甘え」となっている。これら甘えの順位は両国において類似性を示していることから、アジアにおける女子大学生の特徴を表していると考えられる。

Ⅱ.「生活意識」についての日中比較

学生の意識の特徴を捉えるため昨年と同様に、先行研究（篠原、原崎、2000）で得られた生活意識因子を参考にした。具体的には、女性性の特徴として考えられてきた項目、たとえば「女性の方がこまやかな心遣いができる」など4項目からなる「女性性の重視」因子、また、男性性の特徴として考えられてきた項目、たとえば「男性の方が決断力がある」など7項目からなる「男性性の重視」因子それぞれの項目を挙げ、それらの特徴がどのくらいその性にあてはまるものであるかを問うた。

また、これまでの両親と自分の関係をどのように捉えているかを測るために、同じく先行研究より得られた因子より「親は私の話をよく聴いてくれた」など6項目からなる「親との親和性」因子と「礼儀を守るよう厳しくいわれていた」など4項目からなる「親の厳格性」因子を採択した。

さらに、先行研究にて「自己主張性」と命名した因子については、より詳細な自己認知を確認するために、因子としての比較とともに、各項目についても比較検討をすすめてみることとした。

表2．図2に両国学生の意識の比較を示す。これらを見ると「女性性の重視」「男性性の重視」「自己主張」では有意差が見られ中国学生の得点が高くなっていた。(t=2.32, df=360, P<.05；t=5.08, df=360, P<.001；t=4.43, df=360, P<.001)。また、「親の厳格性」に関しては日本学生の得点が高くなっていた（t=2.47, df=360, P<.05)。「親との親和性」に関しては両国に有意差が見られなかった。今回の調査では、日本と中国学生のジェンダー意識差が顕著に見られた。つまり、中国学生は日本学生よりも女性あるいは男性に対して、こういうものだという固定化されたイメージを持っているということが言える。この結果は、昨年、北京市内大学生と日本学生の比較には見られなかった結果である。したがって、この点については、中国内による地域差についても検討が必要となるであろう。

次に自己主張の項目別の比較を表3．図3に示す。これによると「自分の考えをしっかり主張する」「自己を

表2．「生活意識」の平均・標準偏差と検定結果

		日本女子 N=237		中国女子 N=125		検　定
項目数	生活意識項目	平均	SD	平均	SD	t値
4	女性性の重視	14.83	3.15	15.61	2.75	−2.32*
7	男性性の重視	22.09	5.79	25.31	5.58	−5.08***
4	自己主張	14.58	3.33	16.04	2.19	−4.43***
6	親との親和性	20.94	5.58	21.38	4.06	−0.76ns
4	親の厳格性	15.83	3.60	14.92	2.73	2.47*

＊＊＊…0.1%、＊…5％で有意差あり

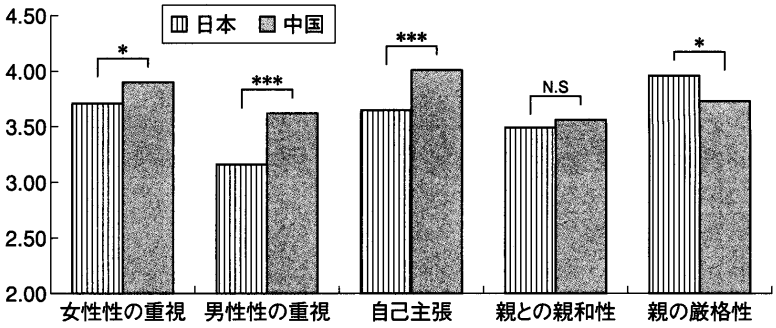

図2．生活意識の比較（1項目平均得点）

表3．自己主張因子の項目別平均値・標準偏差と検定結果

	日本女子 N=237		中国女子 N=125		検　定
自己主張因子項目	平均	SD	平均	SD	t値
自分の考えはしっかり主張する	3.65	1.05	4.17	0.65	−5.04***
自分の考えに基づいて判断する	3.83	0.93	3.93	0.85	−1.02
自分の責任で行動する	3.92	0.88	4.04	0.85	−1.28
自己を素直にPRできる	3.19	1.12	3.91	0.81	−6.29***

＊＊＊…0.1%水準で有意差あり

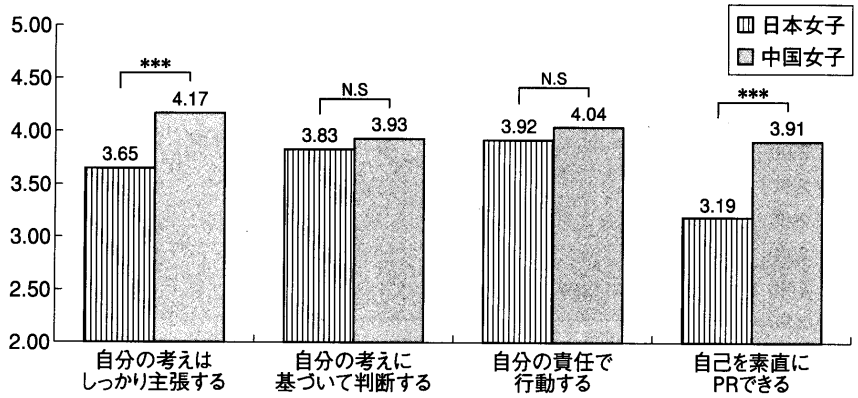

図3．自己主張項目の比較

素直にPRできる」について中国学生の得点が高く（t=5.04, df=360, P<.001；t=6.29, df=360, P<.001）「自分の考えに基づいて判断する」「自分の責任で行動する」については両国に有意差は見られなかった。つまり、自己主張性の両国の差は自分自身の責任や行動の範囲内での差ではなく、他者に向かっての自己表現力の違いであると言える。このことは、集団の一員としての他者との交渉やリーダーシップなどにも影響することが考えられる。

また、親との関係の中で、厳格性は日本の得点が高く、親和性には有意差が見られないという結果は昨年と同様の結果である。つまり日本学生の方が中国学生に比べて、親から礼儀・決まり・言いつけ・言葉遣いなどについて厳しく注意されていたという意識をもっているが、親に誉められた・親といると楽しかった・親は話を聴いてくれたなどの親和性は、両国に差はみられないのである。このような両国学生の意識の違いは、幼児期の親の養育と関係があるのであろうか。後ほどこの点について考察する。

Ⅲ.「愛他性」についての日中比較

愛他性の21項目を主因子法、バリマックス回転により因子分析した。固有値1.0以上をもって因子数を決定したところ3因子を抽出した。第1因子は「誰とでも仲直りできる」「誰とでも仲良くできる」など5項目を含み、「協調的愛他性」とした。また、第2因子は「ボランティア活動をよくする」「進んで障害者と近づきになる」など5項目を含み、「積極的愛他性」と命名した。第3因子は「約束を破られてもまた約束する」や「他人に害を与えられてもそれを許す」など4項目を含み、「許容的愛他性」と命名した。各項目と因子負荷量を表4．に、結果を表5．図4に示す。ここから言えることは、「協調的愛他性」は日本学生が高く、「積極的愛他性」「許容的愛他性は中国学生が高いということであった。(t=2.46, df=360, P<.05；t=10.10, df=360, P<.001；t=2.40, df=360, P<.05)。つまり、日本学生は「誰とでも仲良くする」「みんなと協力する」などの集団としての愛他行動得点は高いが、対面して行動的に一対一の関係

表4．愛他性の因子と項目

協調的愛他性	項目数	因子負荷量
誰とでもすぐ仲なおりできる	5項目	0.869
誰とでも仲良くできる		0.795
みんなと協力することができる		0.653
悩んでいる人の力になってあげる		0.583
不安そうな人を見ると自然に声をかける		0.511
積極的愛他性	**項目数**	**因子負荷量**
ボランティア活動をよくする	5項目	0.720
老人を敬う		0.717
宗教的雰囲気を大切にする		0.679
進んで障害者と近づきになる		0.660
町の中で困っている人に気軽に手を貸す		0.652
許容的愛他性	**項目数**	**因子負荷量**
約束を破られてもすぐその人と約束をする	4項目	0.724
裏切られたと思ってもいつのまにか忘れる		0.699
他人に害を与えられてもそれを許す		0.664
自分の大切なものでも人に分け与える		0.539

表5．「愛他性」の平均・標準偏差と検定結果

		日本女子 N=237		中国女子 N=125		検定
項目数	愛他性因子	平均	SD	平均	SD	t値
5	協調的愛他性	18.12	3.53	17.20	3.05	2.46*
5	積極的愛他性	14.68	3.58	18.41	2.82	−10.10***
4	許容的愛他性	11.88	3.11	12.66	2.57	−2.55*

＊＊＊…0.1%、＊…5%で有意差あり

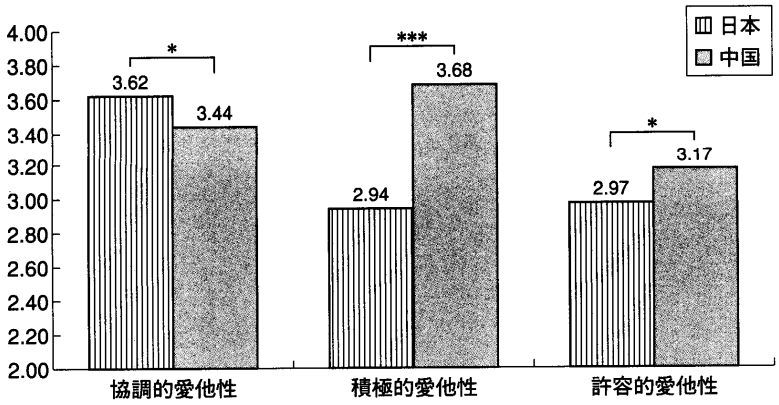

図4．愛他性因子の比較（1項目平均得点）

を必要とする愛他性や他者を許し受け入れる気持ちが中国学生よりも低いという結果であった。また、特に「積極的愛他性」における有意差の原因には、ボランティア活動などと一緒にこの因子に含まれた「老人への敬意」や「宗教」に対する両国学生の意識の違いが大きく影響していると思われる。このような、基本的な価値観は幼児期の親の養育姿勢に関わりが深いのではないかと思われる。

Ⅳ.「幼児期の親の養育姿勢」についての日中比較

まず、両国における家庭環境を把握するために、兄弟姉妹数、家族形態、就園（所）について尋ねてみた。兄弟姉妹数については、中国では1.54人、日本では2.44人で、中国における一人っ子政策の浸透が示された（t=10.46, df=360, P<.001）。また、「幼児期に核家族であったか」という問に関しては、両国ともに平均3.6程度で、全体の70%と考えられ、有意差は見られなかった。さらに、乳幼児期に子どもを他者に委ねるかどうかという生活実態を知るために「幼稚園・保育所に通ったか」と問うたところ、中国学生の平均3.89, 日本学生の平均4.86で、日本における就園（所）率が95%以上と高くなっていた（t=10.62, df=360, P<.001）。

幼児期の親の養育姿勢について両国学生に尋ねた結果

表6．「幼児期の親の養育」の平均値・標準偏差と検定結果

内容	日本女子 N=237		中国女子 N=125		検定
養育項目	平均	SD	平均	SD	t値
幼稚園・保育園に通っていた	4.85	0.52	3.91	1.21	10.21***
幼少期は核家族だった	3.58	1.75	3.67	1.17	−0.51ns
小さい頃は食事時に家族全員が集まっていた	4.16	1.27	4.15	0.79	n.s.
小さい頃から女らしくするように言われていた	3.05	1.31	3.32	1.20	−1.87+
幼少期から自分のことは自分でするように言われていた	3.71	1.17	4.06	0.82	−2.94**
よく抱っこしてもらった	3.59	1.15	2.90	1.11	5.44***
子育ての中心は母親であった	4.03	1.11	2.96	1.13	8.62***
子育ての中心は父親であった	2.30	1.11	2.63	1.05	−2.73**
幼少期悪いことをしたら親からたたかれていた	3.47	1.45	2.74	1.23	4.46***
寝る時に本を読んでもらったり話をしてもらった	3.86	1.27	2.53	1.13	9.84***
幼少期から自分ひとりの部屋で寝ていた	2.00	1.26	2.99	1.36	−6.90***
両親は協力しながら子育てをしていた	3.24	1.31	4.03	1.07	−5.84***
小さい時からお父さんのようになりたいと思っていた	2.52	1.33	3.18	1.15	−4.67***
小さい時からお母さんのようになりたいと思っていた	3.12	1.27	3.19	1.12	n.s.
幼少期に両親から大切に育てられた	4.28	0.89	3.98	1.05	2.88**
幼少期にたくましく育てられた	3.48	1.11	4.28	0.72	−7.22***

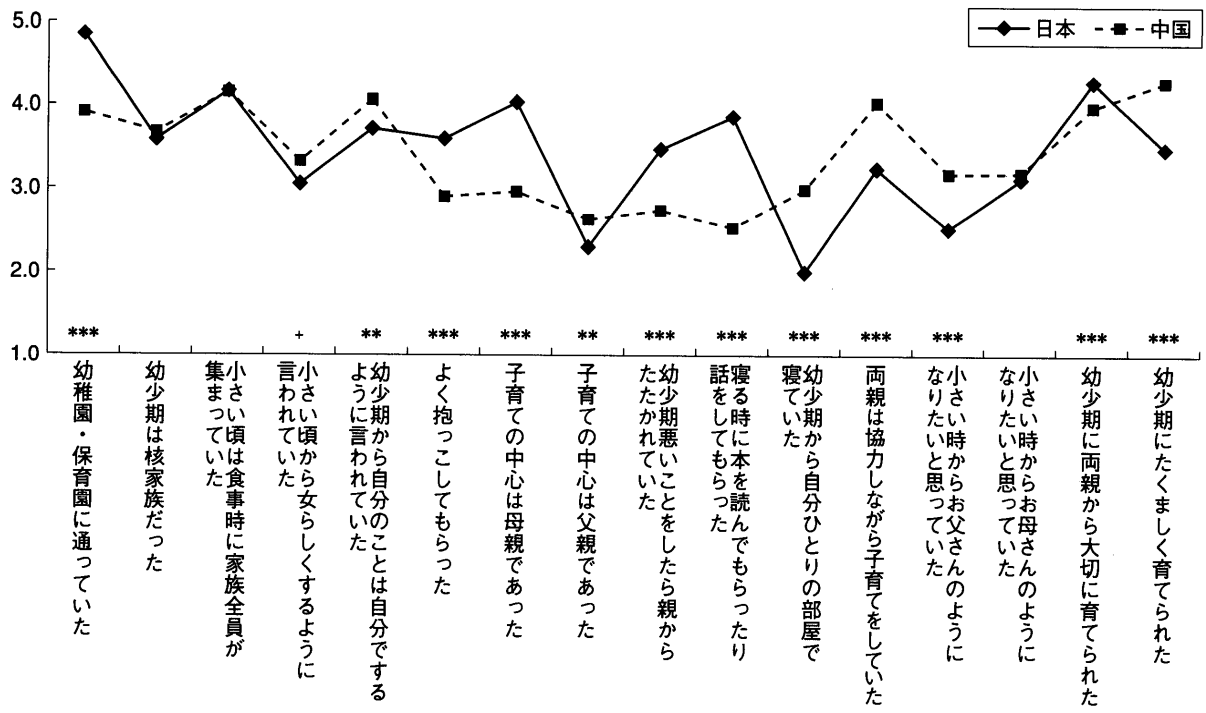

図5．幼児期の親の養育姿勢

を、表6．図5に示す。これより、日本学生が高かった項目は「よく抱っこしてもらった」「子育ての中心は母親であった」「幼少期悪いことをしたら親からたたかれた」「寝る時に本を読んでもらったり話をしてもらった」「幼少期から大切にそだてられた」の6項目であり、中国学生が高かった項目は「小さい頃から女らしくするように言われた」「幼少期から自分のことは自分でするように言われた」「子育ての中心は父親であった」「幼少期から自分ひとりの部屋で寝ていた」「両親は協力しながら子育てをしていた」「小さい時からお父さんのようになりたいと思っていた」「幼少期にたくましくそだてられた」の7項目であった。両国の比較より、幼児期の親の養育姿勢がかなり異なっていることが読み取れる。

まず、子育ての中心人物についての平均は、日本学生は母親4.03、父親2.30となっており、母親であったという印象が強く残っている。これに対して、中国学生は母親2.96、父親2.63、「両親は協力して子育てをしていた」が4.03であり、両親により養育されたという印象が残っているということが伺える。また、「母親のようになりたかった」という平均点は両国ともに3.1程度となっているが、「父親のようになりたかった」に関しては、中国学生は母親の得点と同程度であるのに対して、日本学生は2.52と低くなっている。また、親との物理的な緊密性としては、日本学生の方が、抱っこしてもらったり、寝る時に本を読んでもらったり、また、たたかれたりしながら大切に育てられた印象を持っており、中国学生の方が，自分ひとりの部屋で寝ていた、自分のことは自分でするように言われた、などとたくましく育てられた印象を持っている。また、小さいころから女らしくするようにというジェンダー意識についても中国学生の方が印象に残っているようである。

これらのことから、調査前段階では、「一人っ子政策」による中国学生の過保護養育を想定していたが、結果は、日本学生の方が主に母親から保護されて、中国学生が両親から自立的に養育されていた様子が伺えるものとなった。

以上、日本・中国女子大学生について比較をしてきたが、幼児期の親の養育姿勢が現在の生活観や甘えに関係していることは否めないであろう。中国学生においては、幼児期に両親から自立的にたくましく育てられた意識が自己イメージを明確にし、甘えの低さ、自己主張性・自己責任性の高さ、積極的愛他行動、ジェンダー意識の高さへと繋がっていく様子が伺える。日本学生においては、母親を中心として保護のもとに大切に育てられたという意識が、甘えの強さ、協調的愛他性へと繋がっている。また、日本学生は、親の厳格性についての得点が中国学生より上回ったことから、幼児期に保護され大切に育てられた一方で、成長過程において親の厳しさに関しても強く感じている様子があり、親の幼児期の養育姿勢とそれ以降の養育姿勢に何らかの変化や矛盾があるのではないだろうかとも考えられる。この点については今後、更なる調査が必要となる。また、幼児期の母子関係の重要性が再認識されている昨今において、今回の調査結果では、一見、充実した母子関係が保たれている日本学生において、必ずしも社会的に好ましい成長過程を得られていないとすれば、中国における親の幼児期の養育姿勢に学ぶ点があるのではないだろうか。幼児期の母子関係の重要性についても今後、さらに調査を進める予定である。

（まとめ）

今回の調査で、日本と中国の大学生の「甘え」「生活意識」「愛他性」「親の養育姿勢」という4点から、その差異をみてきた。その結果、4点それぞれにおける違いをまとめてみる。

1.「甘え」に関しては、「引っ込み思案の甘え」「受容・承認を求める甘え」「屈折した甘え」「責任回避の甘え」「非自立の甘え」「追従の甘え」のすべてにおいて、日本学生の甘えが中国の学生の甘えを大きく上回っていた。

2.「生活意識」に関しては、中国学生の男性性・女性性の性役割意識が高く認知されている。また、自己主張及び自己責任性が高くなっていた。日本学生は親に礼儀や言葉遣いなどを厳しくいわれたという親の厳格性を高く認識していた。

3.「愛他性」に関しては、日本学生は誰とでも仲良くする、みんなと協力するなどの集団的・協調的愛他性が高かったのに対して中国学生は、ボランティアに参加する、老人を敬う、進んで障害者と近づきになるなど対面的積極的愛他性や他者を許し受け入れる許容的愛他性が高くなっていた。

4.「幼児期の親の養育姿勢」については、日本学生は、子育ての中心は母親で緊密な関係の中で大切に育てられたという印象をもっており、中国学生は、子育ては両親の協力のもとで、自立的に女性的に養育されたという意識を持っている。

「参考文献」

・北山　修他（1999）「日本語臨床3「甘え」について考える」星和書店
・土居健郎（1971）「甘えの構造」弘文社
・土居健郎（1987）「甘えの周辺」弘文社
・篠原しのぶ・原崎聖子（1999）「青年の「甘え」と社会的適応に関する調査研究」福岡女学院大学人文学研究所紀要　人文学研究　第2輯　173－199
・篠原しのぶ・原崎聖子（2001）「青年の甘えと社会的適応に関する調査研究Ⅲ」福岡女学院大学人間関係学部編研究紀要　第二号　35－43
・早坂泰次郎（1994）「関係性の人間学」川島書店
・河合隼雄（1996）「日本人とアイデンティティー」　講談社
・河合隼雄（1996）「大人になることのむずかしさ」　岩波書店
・小浜逸郎（1997）「大人への条件」　ちくま新書
・篠原しのぶ・原崎聖子（2003）「青年の甘えと社会的適応に関する教育心理学的研究Ⅱ－日本・中国学生の比較を中心に－」福岡女学院大学人間関係学部編研究紀要　第四号　29－35
・町沢静夫（1992）「成熟できない若者たち」講談社
・村本由紀子・山口勧（2003）「“自己卑下”が消えるとき－内集団の関係性に応じた個人と集団の成功の語り方－」心理学研究　74号　第3号　253－262